

女人曼陀羅

上卷

吉川英治著

女人曼陀羅

上
卷

吉川英治



女人曼陀羅（上卷）

昭和三十一年二月二十日 印刷
昭和三十一年二月二十五日 発行

定価二八〇円

地方価二九〇円

著者 吉川英治

発行者 矢貴東司

印刷所 日興印刷株式会社

印刷者 塚田仁也

東京都千代田区神田神保町一ノ三〇

株式会社 桃源社

電話 東京二九局 四九五二番
振替口座 東京 六四三五一番

目

次

女人曼陀羅

—上卷—

耳	ひとり寝	眼と眼の辻	遊民	三味線堀	後家むらさき	父と父	初夜しぐれ	未来鏡
.....								
一室	一四	一七	一六	八	八〇	四	三	七

女人曼陀羅（上卷）

未 來 鏡

一

忘れても、こん夜は、井戸端へ又ものを置きなさんなよ。

なぜかつて？——なぜだか、そいつあ、分らない。

だが、御覽。——今夜はあの通りな月食だらうぢやないか。昔からよく人がいふ。

千日めか、萬日めか、月が病にかゝるのだといふ月食の晩、わきいづる水のそばへ切れものを置くと、必ずその家には、血を見る禍が無くては濟まないといふことを。

「——若いの、何を笑ふんだ」

桶八が、眞面目くさつていへばいふ程、あいての、聲色つかひの芳は、腹をかゝへて笑つた。引つくり轉つた泥龜かめみたいに、涼み臺を、足でばた／＼させて笑つた。

「じよ、笑談も、休み／＼にしてくれ。お月様が、病氣だつて……。はゝゝゝ。病氣だつていやがる。わはゝゝ」

「これつ、何がかしい」

「だ、だつて、爺おやつさんが……」

芳は、涙をこすつて、

「もう、もう、腹が痛てえ」

「馬鹿つ」

澁團扇で、すねの蚊を、ばん、ばん、と荒つぽくたゝいて、桶八は、それツきり口をむすんでしま

つた。氣にくわないやつだといはぬばかりに。

きら／＼と、草の露が、桐畑のくら暗でうごいた。むつちりと、白／＼の乳ぶさを持つた人影が、そこから、

「をけ直しの八兵衛さん」

「おい」

桶八は、いゝ機にと、涼み臺から離れて、

「お玉ぢやないか」

「そうめん食べねえかね？」

「そうめん」

「ゆんべ、川施餓鬼でもらうて來たのを、大勢して、今うちの小屋で食べてるだよ。酒もあるに、早く行かぬと失くなるがな」

「盆過ぎのそうめんぢや、氣がねえの、わしや寝るよ」

桶八が、自分の小屋へかくれると、芳は、團扇でお玉をさしまねいた。

「オイ姉や、ちよつと……」

「ア、カ！」

「こん畜生」

十八のはだは、弾力があつて、眞つ白で、黒髪が長かつた。桐ばたけに、露を降らして逃げてゆく
のを見、芳はふいに追ひかけて行つて、兩腕の中に捕へた。

「——黙つてゐるんだぞ」

「やだあ」

「静かにしろッてえに」

「やだあ、やだあ」

白痴の女に白痴美があつた。芳の暴力は手馴れてゐた。ふたつのもの、影がもつれて土の上へ横になつた。それを、桶八は、小屋の中から生欠仲なまかけななをかみながら、平氣で見てゐた。

土蜂の巢を並べたやうな彼方のお菰小屋では、なべ、茶碗をたたきちらして、みだらな歌を、こゝのお菰たちが合唱してゐた。

そこへ、手ばなしで、

わあーん。わあーん。

髪や、腰に、落葉を付て、お玉が泣きながら歸つて來た。

男の中に交じつて、ほろ三味線をひいてゐた年増たちが。

「あほう、何泣く」

お菰たちは、面白がつて、節をつけ、

「——お玉泣く日にや、おけらがわらふ。おけら泣く夜にやお玉泣く」

箸で、瀬戸物をたゝいた。

はやされるほど、お玉は泣きわめいて、

「芳公が、あてえを。——あてえを、ひどい目に遭はせて、逃げたあ」

「ほんとにかよ！」

病人らしい母親が、小屋の奥から、杖を力に、ぴか／＼した眼で、

「ほんにかよ！ お玉つ」

「ほんにだ。ほんにだ……」

「あの、聲色屋め」

あへぎつゝ、驅けて、

「どこへ行つた、芳公」

何に、つまづいたか、病人は、杖と自分の體を勢ひよく前にはうりだした。お狐たちが、遠くで笑つた。茶わんとぼろ三味線が、ぢやんぢやんと鳴つた。

「ちゝ畜生」

痛さうに、ゆがめた顔をあげると、すぐその石井戸の流しに、誰が忘れたのか、鯖のやうな青光りのする一丁の出刃が置いてあつた。

二

女は、無意識な手に、その刃ものを拾つて、

「――出て來いつ、おらの娘を泣かした奴ツ」

井戸桁にすがつて立つた。

無數のお狐小屋や、やぶや、桐畑や、そして蚊ばしらのうなりが、一つの暗になつて、この世のどん底に、をどんでゐた。

よろ／＼と女は歩み出した。そして、芳公の小屋をのぞいた。芳公は、無いがましなくらゐな三疊蚊帳の中に、心地よげに眠つてゐた。女の體が、蛇みたいにはひ込んだ。

「わつ、何をしやがる」

芳公のびつくりした聲だつた。

つり手が切れる。

女のかんだかい叫びへ、蚊帳が落ちた。ふたつの體がその中で暫くからみ合つてゐたが、やがて女の悲鳴に似た泣き聲がもれ出した。そして、芳公の甘つたるい聲が、

「馬鹿。やきもちを焼くのも、いい加減にしやがれ、何でおれが、お玉などに、手をだすもんか。おめえといふ者が無えなら知らねえこと……」

向ふ側の小屋から、桶八が頬杖をついてこつ方を眺めてゐたが、

「おや／＼、風が變つた」

蚊で、寝られぬとみえ、桶八はまた外へ出て來た。お菰のうちで器用な者が、二十坪ばかりの藪を焼いて西瓜や茄子を作つたけれど、實るそばから誰か喰つてしまふので、實など一つもありはしない。

「思ひのほかだ、この村は」

つぶやきながら、桶八は、そこへ向つて、しや／＼、用をたしはじめた。小便の先から、ほたるが飛ぶ。

「誰の罪だ。——こんな闇を作つたのは」

用をすますと、桶八は、ぶつぶつ獨り語をいひながら、澁團扇を斜にかまへ、あてなしに歩きだした。

餓鬼草紙の繪そのまゝだ。

どこの小屋をのぞいても、病人があるか、飢ゑがあるか、老衰があるか、明るい光は見當らない。たま／＼、若い聲がすると思へば、惡酒に酔つて仲間か、或は、顔まけするやうな、お菰同士の男女の戯れである。

「息ぐるし……」

田原の方へ出ると、そこには、吉原の燈が遠く見えた。仲之町のぞめきや、高樓の浮れ甚句が、流れてくる。

「あつちの世間と、こつ方の世間——たいへんな違ひだなあ」

桶八は、つぶやいた。

この淺草小屋とよぶお孤寄せ場へ落ちて來てから、彼はまだ十日ほどにしかならなかつた。で、見る事、聞く事が物めづらしい。

こゝには、百幾ツの小屋と、千人に近い浮浪者が居た。しかし、それをお孤とはよんでも、足腰の立たないおこもだけではない。

心中者の片割れもある。當時の白洲の掟で「非人預け」をいひ渡された破倫な後家さんもある。若い破戒僧なども落ちて來てゐた。

盛り場の掃除や、鍋鑄かけ、焼つき屋、箕直し、鏡とき、大道藝人などの、雑多な巷ちまたの者も、こゝの寄せ場頭、車善七くるぜんしちの手にかゝつてゐる人々だつた。

「——こんなのが、江戸には、入谷にも本所にも山の手にもある。頭數にすれば何萬人。日本中では、何十萬か知れぬ。このぶんで行くと、今に世間は、たゞの人より寄せ場者の方が多くなるぞ」

皮肉らしい齒をむいて、桶八は、聲のない笑ひを空に向けた。

「……オ、そろ／＼月が欠けて來たな。今宵の月食は、眞つ黒になるぞ。——今の世の中みたい

に」

すると、後で立ちどまつた人の氣配が、

「老人」

と、ひく／＼呼んだ。

「誰だい？」

「ちと訊ねたいが、寄せ場がしら車善七殿のお住居は、どこであらうか」

——侍だな。

桶八は、聲で感じた。

だが、こゝは決して侍のくる場所ではないが——と變にも考へられて、かどみ腰に、やみを透かした。

三

うつ向きがちな、眉が若い。

人目を怖れてか、侍は、黒紗のうすもので顔をつゝみ、青貝の印籠に、刀さへ、細ごのみだつた。
をかしいほど、粹な武士ではある。

（「こんなのが女にもてるのか、腹もなければ腕もない當世武士、イヤ、鼻持ちがならねえ」
値ぶみをしながら、桶八は、先に立つて歩いて行つたが、やがて、

「旦那、こゝがお尋ねの屋敷で」

立ち止まつて、指さした。

「ほ、こゝか」

見まはして、

「——御苦勞だつた」

紙入をだし、案内賃をやらうとすると、桶八は、

「まつ平」

手を振つて、立ち去つた。

お弧から金を斷られたのも意外なら、また眼のまへに見た車善七の住居の立派なものにも、侍は、「はて、こゝかしら？」

と、案外らしい顔つきだつた。

くぬぎ林を境に、淺草觀音堂と背中合せの位置にある寄せ場の城主——江戸中の浮浪者の元締めといつた形、廣い土塀をめぐらし、門だけは質粗だが、小旗本ほどの構へはある。

はいつてゆくと、用人が出る。長押には檜、室には書軸、いかにも大家の格式である。

「てまへが、車善七です。——御用向きは」

頑強な人物、滋味のついてきた四十五六の年配。その善七は彼の前に眞四角に坐つて云つた。

「は……私は」

「あいや」

善七は、名を告げようとする客のことばを折つて、

「こゝでは、世間なみの辭儀は無用。お名乗りなさるには及ばぬ。たゞ、御來意を」

侍は、思ひきつたていで、

「では」

と、兩手をついた。

然し、聲は渴いて——

「お願ひでござる。雪葉どのに會はせて下されい」

「ほ、娘に」

「死を決して參りました」